

談話室

莊子とAIと

林 宗 明*

Muneaki Hayashi

「これを手に得て心に応ず、口言う能わず」

(莊子、天道篇)

この文句は、齊の桓公（中国春秋戦国時代）とこれに仕える車鍛冶（くるまかじ）輪辺（りんべん）との緊迫した対話の一節である。それは、ある時、桓公が御殿で当時の古典を朗読していると、日頃からお側で天子の車の面倒万端を看ている輪辺が近くに寄って来て声をかけた。「天子様、それはどう言う本ですか」。桓公は吾が意を得たりとばかり、「これは古（いにしえ）の聖人君子の説かれた有り難いお言葉の数々が書いてあるんだ。」、輪辺「されば、その方々は、今生きておられますか。」、天子「何を申すか、とっくの昔に亡くなられた人ばかりだ。」、輪辺「ははあ、それでは、その本の内容は糟粕（かす）です。」こう言われて桓公はカッとになった。「何を失礼な。ひと文字も読めないくせに、朕（ちん）の読んでいる本を“かす”だとは……。お前を死刑にしてやる。ただ、訳があるなら申してみい。」

そこで輪辺は次のような思想を披瀝する。「私はかような老齢になるまで車輪を削ってきました。」（当時の車輪は大きい輪の中に少し小さい輪を嵌め込む二重構造になっていたらしい）そして原文の調子では“輪を削るに、徐（おもむ）ろにすれば則ち甘くして固からず、疾（すみや）かにすれば、則ち苦にして入らず。徐むろならず疾かならざるはこれを手に得て心に応ず”と続く。つまり作業に際して、「その日の木材の硬さ、木目、湿り具合、刃物の切れ味など各種の条件下で、材料と道具を手にしたとき身体（からだ）全体が自ずから、早からず遅からず最適のスピードで動くのです。この境地は人に説明することがどうしても出来ません。昔の聖人たちも同じように、思想の真髄を人に伝えることが出来ないまま、苦しい思いで死んで行ったに違いありません。本に残っているのは古人の深い思索とは裏腹に、ほんの上っ面（つら）のこ

とだけですので、糟粕だと申し上げたのです。」

この返答によって、輪辺が死罪を免れたか否かは不明であるが、この寓話で言わんとする応心の境地（総合と直観）は、他人に伝承する事が困難であり、ただ各自が体験を経て自力で得るものであって、これを符号や文章によって表すことが出来ないことを説いていると思われる。（ほかにも種々の解釈が有り得るであろう。）

さて、近頃AI（人工知能）論議がやかましい。その中の一つであるエキスパート・システム（ES）は、専門家の知識を分解して箇条書きなどにして知識ベースを作り、問題ごとに、必要に応じてこれらを取り出して組み合わせ、解答を構成して行く。これは「分析と再構成」とでも称すべき手段であって、前記の「総合と直感」とはまさに対照的であるが、面白いことに、ESの最大の問題点の一つとして挙げられるのが、「知識の伝承」と「知識ベースの構成」であり、専門家の持っている奥義を知識ベースの中いかに取り入れるかは知識工学者にとって苦心の存するところであると聞いている。すなわち、莊子（B.C.500頃）以来の問題を今日なお引きずっていると言うべきであろうか。この状況に対して、今後は知識工学者や哲学者等の研究と協調により従来神秘とされた勘とコツの境地もいつかは解明される日が来る事が切望される。

尚、本文は住友電工の田中良雄氏、井上文左衛門氏（共に故人）の昔日の御教示に依る処が大きい。記して深甚の謝意を表する。

* 京都大学工学部電気工学科教授

〒606 京都市左京区吉田本町